

令和4年度 第2回 社会福祉士養成科 教育課程編成委員会 報告書

開催日時：令和5年2月17日（金）15：00～16：30

場所：zoom 形式

参加者名

委員 藤井 亘 （東京都自立支援協議会 委員）

委員 小田 智雄 （社会福祉法人やまて福祉会 理事）

委員 佐藤 初美 （NPO 法人 10 代・20 代のにんしん SOS 新宿 理事長）

教員 秋山 雅代 （社会福祉士養成学科 学科長）

教員 片桐 正善 （社会福祉士養成科 科長）

職員 松丸 浩子 （事務局長補佐）

職員 松木 健太 （教務課）

議題：

1. 前回振り返り・進捗報告

- ・松木職員より令和5年度 オープン講座について共有を行った。

「現場の声は大事だがそれにより過ぎない」という前回のキーワードを元に、構成を検討した。令和5年度は「貧困・低所得」をキーワードとし新宿スープの会へ、体験プログラムとして介護食体験をキューピーへそれぞれ依頼予定。まだ承諾をいただけているわけではないが、この2つの回に外部講師を招くとして検討を進めている。

また新たなプログラムとして、児童分野、及び嚥下障害を加え、学生がより幅広い知見を持てるよう構成した。

- ・オンライン研修でコミュニケーションスキルや企画力、問題提起できるような要素を取り入れた研修について（続報）藤井委員より共有いただいた。

Zoom のブレイクアウトルームを活用し、ゲーム感覚で謎解きをしながらコミュニケーションを取り合うということをやっている施設もあると聞いた。また、施設で行うレクリエーションにおいても企画力がある人材が少なくなっているという。睦月会の綿祐二先生からは企画力を高めるために、研修というよりはフリーストークのような形式でメタバース（仮想空間）を活用し、どんなことができるかみんなで考えたという。その中でも面白い企画を出した方には、実際に任せるといようなことを仰っていた。そのほか、対面で行っていたチームビルディングをオンライン化するなど施設もあるため、新たな研修スタイル増えている。

片桐教員）入学後に行う全学生面談の中で、担当教員によっては「なりたい将来像」を記入させ、そこからやるべきこと（目標）を書かせるというようなことをしている。これをきっかけに話しやすくなる学生もいるが、夜間部は社会人で経験豊富な学生もおり、工夫のしどころ。また企画という点において、ちょっとした空き時間などに手遊び程度でも、そ

の場で考え、周りを巻き込み何かをやる人材は現場でも優秀だなと感じる。とはいえ学校で何か教えることはできておらず、実習指導などの枠の中で、チームで何か企画してみることが少しできるかなと感じた。

2. コミュニケーションに関する取り組み共有

片桐教員より、今年度新たな取り組みとして留学生に協力いただいた、外国人に対するコミュニケーションについて共有があった。

演習の1コマとして地域団体及び留学生にご協力いただき、「外国人とのコミュニケーション」をテーマに演習を実施した教員がいた。留学生に福祉制度を説明し、どれだけ伝わっているのか、どのような話し方をすれば、より伝わりやすいのかを体験してもらった。これまで知的障害者にご協力をいただいて同じようなことはあったものの、外国人（留学生）ということとはなかったため、新たな気づきが生まれた学生も多いと思う。

引き続き各団体とつながりを持ちながら、私たち自身が型にはまらず教育を実践していきたい。

3. 次年度取り組み内容検討について

片桐教員より次年度の取り組み内容検討について説明があった。

国家試験を踏まえた本校の1年間のカリキュラムを前提に考えると、私たちだけでは、やれることの限界を決めてしまうことが多い。

その為、近年現場で起こっていることや、活動の幅が広がっていると実感している例など、雑談ベースで伺いながら、本校として「できること」を見つけていきたい。

片桐教員)

近年、言われたことはやるが、それ以上のことをやらない。いわば「無駄なことはやらない」、「答えのみを求める」ような学生が増加した印象を受ける。

個人的にはカリキュラムを外すモチベーション（無駄をやるモチベーション）を高めてあげたいと思い、駆られながら、自身の体験談などを交え伝えているが、中々学生には響かない。現場でも何か感じることはないか。

佐藤委員) こういう時はこうやればいいというやり方が当てはまらなくなっている状況。しっかりと自己覚知を行ったうえで「自分の価値観・経験値で相手を見ない」というところからスタートできないと、トラブルにもなりかねないという印象を特にこの3年は受けている。

ソーシャルワーカーの中でも、答えを求めてもその通りに行かず、ジレンマを起こしたりメンタルを病んでしまう方が増加すると感じている。学生の中でもこれから課題になってくと思う。

また、近年は追い詰められて歌舞伎町でさまようしかない若い女性など、外国人ではないものの日本語の語彙力が乏しくなっており、わかりやすい単語で伝えていかなければ、話が通じない印象がある。

小田委員) 発想の引き出しがどれだけあるか、どんな時にどんなところに繋げていくのか、これがないと支援が詰まっていってしまう。まじめな方であればあるほど、何とかしたいという思いが空回りし、高いゴールを定め、それに届かないということで悪い方向へいってしまう。

授業や研修などオンライン化されるような便利な世の中になったことで、前後に参加者と会話する機会なども減り、人との付き合いもドライになり、かつ、必要最低限だけを求めるようになってきているように感じる。

どこかのタイミングで、無駄をやる意味（無駄を無駄のまま終わらせず、プラスに持っていく考え方）を伝えていけると、社会に出たときに生きてくると感じる。

藤井委員) 特に若い世代は「とりあえずやってみよう」が響かないと聞く。しかしこれが一番大事と感じている。現場に必要なスキルはネットで検索しても出てこず、現場での OJT も含めてやる必要があると感じる。

片桐教員) 話しを聞いて、私たちがこれまで行ってきたような知的障害者の研修など、つたない言葉で関係性を作っていくということは非常に大事で、根本のようにも感じる。また、OJT を含めた現場の魅力を伝えながら、「無駄も含め現場は行くんだよ」「無駄も含め現場だよ」と伝えていくことは大事になると思う。回答をいち早く見つけることが勉強とならないように引き続き指導していきたいと思う。カリキュラムの中でも「無駄もあつての現場」の魅力を伝えられるよう、実習指導など検討していきたいと思う。

4. まとめ

- ・無駄を避けることができるようになった昨今、発想（想像）力や忍耐力、挑戦する力など、大切なモノが欠けてきている。
- ・無駄を含め現場であることを説き、無駄なことが無駄として終わらないよう、プラスに変える意識を持たせる必要。具体的な内容はカリキュラム内容含め次年度以降、改めて提案を行う。
- ・見学やボランティアなど、学生が積極的に参加し現場を知る仕組みを検討していく必要がある。
- ・引き続き委員方と意見交換をしながら、学校でできること、現場に求めることなどを引き続き検討していく。

次年度は対面にて委員会を実施する。日程は後日調整とする。

以上